

平成 20 年 8 月末岡崎市「ゲリラ豪雨災害」のコミュニティ放送

日本災害情報学会 2008 年 8 月末豪雨等調査団
第 3 次デジタル放送研究会
(独)防災科学技術研究所 アジア航測(株)
天野 篤

平成 20 年 8 月 29 日未明、岡崎市は「ゲリラ豪雨」に伴う中小河川の増水および溢水と内水はん濫による浸水で、死者 2 名を出す水害に見舞われた。広く市民への防災情報伝達の一端を担うコミュニティ放送局（CATV、コミュニティ FM）が、市災害対策本部からの依頼を受け、そのときどう放送したか、初動期に焦点をあて聞き取り調査を行った（表 1）。

特徴は、①通常放送（自局制作番組）時間終了後の真夜中の出来事、市との災害放送の協定に基づく対応、市からの避難情報等が取り決めどおりの方法で届かず確認に手間取った、④大雨の降り始めから発災までの時間がごく短くすでに被害が拡大している最中だった、ことなどがあげられる。以下、調査結果を報告する。

表 1 ヒアリング調査概要

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">年月日：平成 20 年 10 月 22 日(水)訪問先： 13:30～14:20 ミクスネットワーク株式会社
17:15～18:30 株式会社エフエム岡崎調査者：赤石一英、厚田大祐、天野 篤、須見徹太郎、武居信介、新堀賢志、廣井 慧、三島和子、水上知之、蔡 垂功（①のみ）、谷原和憲（〃） |
|--|

1. ミクスネットワーク（CATV）

ミクスネットワーク株式会社（以下、ミクスと略記）は、平成 2 年 11 月 3 日に開局した有線テレビジョン放送事業並びに電気通信事業者で、岡崎市内をサービスエリアとしている。サービス内容は、アナログ 39 チャンネル（うち有料 5）、デジタル 79 チャンネル（うち有料 21）、音声系（ラジオ）6 チャンネルとなっている。加入数は約 6 万接続で、平成 18 年に合併した旧額田町エリアについては、災害当時、ケーブルを敷設途上だった。



写真 1 ミクス玄関



写真 2 ミクス中継車

1.1 防災緊急放送の取り組み

ミクスは、愛知県および岡崎市との協定に基づく防災緊急放送を実施している。取り組みの経緯等は、以下のとおり。

- 平成9年1月17日、岡崎市と「災害時の放送に関する協定」を締結。
- 平成17年7月12日、岡崎市広報課・防災課と、どのような場合に防災緊急放送するか、何を伝達するかなどの合同会議を行い、具体的な内容を取り決めた（表2）。
- 平成17年8月21日の台風時に最初の防災緊急放送が行われた。大雨洪水警報、災害対策本部設置、市から届く道路交通情報等を流した。
- その後、平成17年度に4回、平成18年度に2回、平成19年度に10回、平成20年度に10回の防災緊急放送を実施した。「避難勧告」は、一昨年1軒に対して出ただけで、今回の平成20年8月28日が二度目（複数を対象にしては初めて）だった。
- 平成20年3月31日、愛知県および岡崎市と「土砂災害情報相互通報システムの運用に関する協定」を結び、機材の提供を受け、4月以降L字画面による放送を開始した。県からは雨量情報と土砂災害危険度情報がダイレクトに届くようになった。

1.2 防災緊急放送の方法

ミクスの防災緊急放送は、以下のとおり実施している。

- 防災緊急放送は、自局制作のコミュニティチャンネルふたつのうち、下記の①チャンネルおかざき（アナログ12ch、デジタル132ch）で流している。

チャンネルおかざき

行政広報情報（行政ニュース、講演、農業情報、教育番組、議会中継等）

電波障害対策で配信している先と、有料で視聴している契約者の双方に配信される

チャンネルミクス

各種地域情報（民間のお店、催し等）

有料契約者のみが対象

- 独自チャンネル以外の再配信番組分については、契約上、加工できないと考えている。
- 防災情報のソースやデータは、岡崎市と愛知県の2カ所から入る。ミクスに市民から直接情報が入ることはない（問い合わせはあるが…）。
- 流す情報は、市から届いたメールを見て、手で入力している。自動表示も可能だが、責任上、確認のためにそうしている。メール閲覧 L字表示のタイムラグは2～3分。
- 市から届いた内容は、原則、そのまま使う。システムに字数制限があるので、相談して若干編集をすることはあるが、書き換えることはない。
- 県の高度情報システム*端末はミクスにはなく、市が見てメールに載せてきたら入る。

* 愛知県の高度情報システムは、もともと消防庁への災害報告事項を市町村から県にあげるのと、県下の市町村間で災害情報を共有する目的で開発された。その後、在名の主要マスメディアにも閲覧端末を設置している。避難勧告・避難所等の4情報はXMLで受けとれるように改良を進めていたが、今回の豪雨災害にはぎりぎり間に合わなかった。

表 2 「災害時の放送に関する協定」に基づくミクスとの取り決め事項（抜粋）

「災害時の放送に関する協定」に基づく MICS との取り決め事項			
<p>1 災害時の放送に関する協定に基づく放送(以下「防災緊急放送」という。)は、原則として市災害対策本部が設置され、又は設置が決定された場合に行うものとする。 市が災害対策本部を設置する基準は次のとおりとする。(災害対策本部活動要領より)</p> <p>(1) 次の警報の一以上が発表されたとき(警報が一次細分区分で発表されたときは、愛知県西部のものとし、二次細分区分で発表されたときは、西三河南部のものとする。) ア 大雨警報 イ 暴風警報 ウ 洪水警報</p> <p>(2) 震度 5 弱以上の地震が発生したとき。(十王公園の震度) 但し、震度 4 の地震が発生した場合は、職員の非常配備体制がとられるため、本項目については、<u>震度 4 以上の地震が発生した場合には防災緊急放送を行うものとする。</u></p> <p>(3) 矢作川洪水警報が発表されたとき。(水防警報)</p> <p>(4) その他市長が必要と認めたとき。</p>			
<p>2 災害対策本部からの防災緊急放送の依頼を行う手段は次のとおりとする。</p> <p>(1) 通常：Eメールによる送信(***@***.jp) MICS は、Eメールを受信した場合は、<u>受信確認の返信を行うものとする。</u></p> <p>(2) Eメールが利用できない場合 FAX(編成部***-****)とする。 MICS は、FAXを受信した場合もEメール(返信)又は電話(災害対策本部***-****)で市へ確認の連絡を行うものとする。</p> <p>(3) Eメール・FAX が利用できない場合電話(編成部***-****)とし、<u>編成部につながらない場合は、「MICS 編成部緊急連絡網」の順に連絡するものとする。</u></p>			
<p>3 市が依頼する防災緊急放送の内容と送信のタイミング等(重要 : 標準)</p> <p>(1) 風水害に関する警報の発令・解除情報 大雨、暴風、洪水の種別とする。 <input type="checkbox"/> 災害対策本部職員の体制が整ったら直ちに送信</p> <p>(2) 降雨等の観測情報(特に警戒を要すると思われる項目について放送) 降雨量(累積雨量、時間最大雨量)、瞬間最大風速、河川水位(矢作川・乙川)等 <input type="checkbox"/> 第 1 報は、本部が設置され、必要な情報が収集され次第速やかに送信 <input type="checkbox"/> 第 2 報以降は、原則として 1 時間ごとに送信</p> <p>(3) 急傾斜地等の危険性が高まった場合(次表の第 1 及び第 2 警戒体制とする)</p>			
区分	前日までの連続雨量が 100mm 以上あった場合	前日までの連続雨量が 40～100mm 以上あった場合	前日までの降雨がない場合
第 1 警戒体制 (避難準備の広報)	当日の日雨量が 50mm を超えたとき	当日の日雨量が 80mm を超えたとき	当日の日雨量が 100mm を超えたとき
第 2 警戒体制 (避難勧告)	当日の日雨量が 50mm を超え、時雨量 30mm 程度の強雨が降り始めたとき	当日の日雨量が 80mm を超え、時雨量 30mm 程度の強雨が降り始めたとき	当日の日雨量が 100mm を超え、時雨量 30mm 程度の強雨が降り始めたとき
<p>■表の状況となったら、速やかに送信</p> <p>(4) 矢作川洪水警報 矢作川洪水警報を市が受信し、情報内容を確認後速やかに送信</p> <p>(5) 震度 4 以上の地震発生情報 <input type="checkbox"/> 災害対策本部職員の送信体制が整えば直ちに送信</p> <p>(6) 避難所開設案内 <input type="checkbox"/> 避難所の開設が決定し、運営職員の体制が整えば直ちに送信</p> <p>(7) 道路等の通行止め ■道路等の通行止め情報を市が受信し、内容を確認後速やかに送信</p> <p>(8) 避難勧告・指示 ■避難勧告・指示を市が決定後、速やかに送信</p> <p>(9) 東海地震に関する情報(観測情報、注意情報、予知情報・警戒宣言) ■市防災課職員又は地震災害警戒本部の体制が整ったら直ちに送信</p> <p>(10) その他必要な情報 地域的な被害が発生した場合や安否確認に関する情報などを状況により放送</p>			
<p>4 テロップによる情報の表示方法 (略)</p>			
<p>5 Eメールによる防災緊急放送の依頼送信の例(他の方法の場合もEメールに順ずる) (略)</p>			
<p>6 その他必要な事項は、MICS と市が協議して定めるものとする。 (略)</p>			

1.3 防災緊急放送の画面

ミクスでは、平成 20 年 4 月以降、従来の文字スーパー（テロップ）による防災緊急放送を、図 1 に示す L 字画面にリニューアルした。



図 1 ミクスの防災緊急放送 L 字画面見本

- ・ L 字画面の中で、市の防災～災害情報と県の土砂災害情報とをカテゴリー分けして表示している。
- ・ 画面下のロール文字部分と右側の地図画像（jpeg）は市からメールで、左側の雨量等データは県からオンラインデータで入ってくる。
- ・ LEVEL1～3（通常・中規模・大規模災害時）は、市の判断の連絡に基づく。
- ・ ひとつのロールの最大は 450 文字で、L 字化でかつてのテロップからほぼ倍になった。これを複数テーブル立てられる。
- ・ 雨量は岡崎市に關係する観測データを自動表示している。土砂災害危険度情報はいったん社で判断してから表示を ON にする。
- ・ 地図画像表示は、番組の動画部分を丸々さしかえる方法をとっており、そもそも放送中の番組は裏に隠れて音だけが流れる。
- ・ L 字画面へのリニューアルにあわせ、毎月、防災緊急放送の利用案内を流している。しかし、そのときに他のチャンネルを見ていると、①のチャンネルにだけ映る（防災緊急放送開始時のチャイム音も同様）ため、防災緊急放送がされているかどうかはわからない。



写真 3 ミクス聞き取り調査の様様



写真 4 ミクス L 字画面放送機材

1.4 発災当日の状況

ミクスでは、平成 20 年 8 月 24・25・28・29・30・31 日、続けて 6 度、防災緊急情報を流した。うち、29 日未明の状況について尋ねた。

- ・ 前日にも石原町等に対して大雨洪水警報が出され、21 時近くまで防災緊急放送の態勢をとっていた（旧額田地区が避難勧告対象で災害当時はサービスエリア外）。
- ・ 当日、00:06 の大雨洪水警報の第一報は、市のメルマガで受けた。続いて、市から「編成@（編成スタッフ全員）」アドレス宛に同報メールが届いた。真夜中、対応するためにスタッフが 1 名出社した。
- ・ 基本的に一人が詰めて防災緊急放送する。昼間はずっとスタッフが居るので、社員が交代しながら続けた。長丁場になると一人態勢では難しく、どの時点で判断するかは難しいところだが、今後は交代制を考えたい。
- ・ その後朝にかけ、市から FAX やメールが頻繁に届いた。避難勧告が出るのは珍しく、いつもと感触が違っていた。
- ・ 当日流した防災緊急情報は、市からの避難勧告・気象情報・土砂災害の速報が主。これとは別に、記者クラブ発表分の被災情報（ほぼ定期的な発表）も入ってくる。
- ・ 29 日の避難勧告は市内全域が対象で、エリアや避難先が書かれておらず、地図も出していない。28 日は町名単位、30 日は学区（町名よりも広い）単位で避難勧告対象エリアを流した。個々の避難所の場所についてはミクスでは出していない。
- ・ 発災は深夜の放送終了後の時間帯で、黒み画面に L 字を切って防災緊急放送を流した。よって、チャンネルを見ている人はあまりいなかったのではないかと（平素、市から災害放送実施の周知は行われているが）。そのとき実際に何世帯がチャンネルを視聴しているかはわからない。総代ら自主防災組織の代表者がミクスを見るようにしていることもない（ミクスに接続されている家になっているかどうかはわからない）。
- ・ L 字画面は、防災緊急情報と土砂災害情報をそもそも対象としているが、「岡崎市からのお知らせ」のテーブルを持っているので、その後の生活関連情報も継続して流した。例えば、被災証明書発行・ゴミ処理・相談場所開設等、市のインターネットホームページや防災行政無線などと同じ内容の情報が多数。今回、民間ベースの生活関連情報やボランティア情報などはとくに流していない。
- ・ 災害対策本部が立ち上がっている間、10 月の頭頃まで 12ch は常時 L 字画面のままにして、どんどん流した。新しい情報が入ったときはチャイムを 2 回鳴らし、古い情報は順次削除していった。
- ・ ミクスでも現場の独自取材をしているが録画となる。記録映像をストックする意味と、夕方や翌日のニュースで放送した。被害の取材は、夜が明けてから 3 クルーで行った。
- ・ ミクス自体が受けた設備被害は、浸水そのものではなかった。契約者宅に貸し出した機材が水で被害を受けたのは数件あった。いっぽう雷害は約 200 件あった。電源から逆流してチューナなりインターネットのケーブルモデムに入ってきて故障するケースが多い。

- ・ 県の土砂災害危険度情報は雨量観測時点から約 20 分遅れて市に届く。30 日はその情報をもとに避難勧告の準備を進めていたが、対処しているうちに危険性が薄れてしまい、途中で流すのを止めた。

2. エフエム岡崎（コミュニティ FM）

株式会社エフエム岡崎（以下、FM おかざきと略記）は、平成 9 年 9 月 1 日に開局したコミュニティ FM 放送局で、愛知県岡崎市街を中心に西三河の商圈をカバーしている。周波数 76.3MHz、送信出力 10W で、愛知産業大学 2 号館屋上のアンテナから西方向に送信している。放送区域内には約 58 万人が住む。リスナーは、昼間はドライバーと自宅にいる主婦が多い。インターネットで動画と音声も流すようになり、遠方の聴取者が増えたという。

可聴エリアは市内全域をカバーしておらず、旧額田町など岡崎市東部エリアでは全く入らない。市街中心部の稲熊町等も山陰の谷間になって入りが悪い。逆に市外の安城・刈谷・知立の方は聴ける。災害時非常放送については、岡崎市のみ扱っている。



写真 5 岡崎市情報ネットワークセンター



写真 6 FM おかざきサテライトスタジオ

2.1 災害時非常放送の取り組み

FM おかざきは、ミクスとともに、岡崎市との間で防災協定（「災害時の放送に関する協定」）を結び、災害時非常放送を行っている。愛知県との協定はない。

- ・ 愛知県の高度情報通信ネットワークシステムの情報は、FM おかざきには来ていない。
- ・ 気象庁（台）からの発表文も送られて来ない。

2.2 災害時非常放送の方法

FM おかざきの災害時非常放送は、以下のとおり実施している。

- ・ 警報等が出て岡崎市の災害対策本部が設置されると、放送局と担当者 3 名宛に市から要請の電子メールが届く。それへ確認したという返信メールをする。
- ・ 続いて非常放送態勢の準備をする。自主制作生放送時間帯（月～木曜の場合、08：00～13：15, 17：00～20：00）はスタジオに人がいて問題ない。中間の日中と、生放送終了後 1～2 時間も事務所に人がいてすぐに対応できる。それ以外の時間帯は連絡が来たら動きだすことになる。

- ・ 警報が出ると予想されるようなときは、予めスタンバイしていることもある。
- ・ 災害時に放送する内容は、市から提供される情報と、契約している民間気象会社からの気象情報とを繰り返し流している。

2.3 発災当日の状況

平成 20 年 8 月 28 日から 29 日にかけて実施された、FM おかぎきの災害時非常放送について話を聞いた。

- ・ 28 日の昼に一度大雨洪水警報が出たが、そもそも岡崎には災害が少ないこともあり、あまり災害が起きそうな気はしなかった。そのときは生放送中だったので、即、「只今 11：33 に大雨洪水警報が出、岡崎市では災害対策本部が設置されました」とアナウンスした。その後、避難勧告を放送した。
- ・ 20：20 に警報が一旦解除された後、帰り支度をしたが、気象情報を見てまだ危なそうな気がしたのと、西北の空に稲光が見えていたので、帰らずに一人残って事務仕事をしていた。
- ・ 案の定、深夜から雨が降り始め、24：00 頃にはひどい雷になった。FM 送信電波と CS 受信電波の瞬断がひどくなり、雷害による放送機器の停止が怖かった。
- ・ 自分が機械を見、喋りを担当してもらうために近所に住む女子アナウンサーを呼んだ。しかし、途中で道が通れずに何度も迂回して、01：00 を過ぎてようやくたどり着いた。
- ・ 再送信している CS 放送デジタルラジオ音声のコーデックがおかしくなり、3 時頃まで繰り返し番組を中断し、リブートを 10 数回かけて復活させた（停止用マニュアルが用意されており、強制的に音源の中にコメントを入れて中断し音楽をかける）。
- ・ 29 日 01：00 すぎ頃、「災害対策本部設置」のメール連絡がやっと届いた。通常は 10～30 以内に届くが、今回は遅かった。00：06 に大雨洪水警報が出たこと、すなわち市の災害対策本部が連動して立ち上がったことは、民間気象会社の連絡からわかっていた。
- ・ 02：10 に出た避難勧告は、市からいっこうに情報が届かなかった。手書きの FAX が送られてきたのが 20 分遅れの 02：30 頃で、それも広報課からだった。きまりどおり防災課からのメールで来ないため、情報の真偽をどう判断していいかわからず、市にメールしたが返事はなく、電話もつながらなかった。よって放送しなかった。
- ・ その間も瞬断があったり停電があったりして、局の放送設備の維持に追われていた。サーバも一度ダウンした。
- ・ さらに 10 分後位にもう一度、「自衛隊の派遣要請をした」という内容の、次の手書き FAX が送られてきて、どうやら本物らしいと思った。
- ・ 一方、ミクスは CATV で 02：35 頃に「全市避難勧告」のテロップを入れ始めた。それを見て、とりあえず、「大雨洪水警報が出ている」という現在の気象情報を流した。
- ・ 03：00 頃 NHK で「岡崎市内全域に避難勧告が出た」というニュースを放送したので、複数確認できたことにより、03：10 に避難勧告を放送した。
- ・ それ以降は広報課から活字の FAX が続々届くようになり、気象情報とともに、新しい

情報が来る度（約 30 分ごと）に、朝まで放送した。防災課からきまりどおりメールが届くようになったのは、5 時か 6 時だった。

- その後も夕方まで、通常の生放送の間に原稿を入れて、被害状況等を流した。
- 大雨洪水警報が解除されても災害対策本部は続いていたので、もうひと晩、朝まで対応が続いた。
- 30 日に出た避難勧告も放送した。正規に情報が来たものに関してはすべて対処した。
- 今回は、リスナーから届けられた情報のオンエアはなかった。電話取材もしなかった。災害時の身近な生活情報（ゴミの処理や手続き等）も、市から受け取った情報に従って流した。
- 独自の文言で災害の危険性の注意を呼びかけることもある。定型文のマニュアルは一応用意されているが、今回は使わなかった。「だからどうするのか」の情報が欲しい。
- 交通情報は愛知県に電話をかけて問い合わせている。事故で通行止めがあると FAX が流れてくるが、当夜はそういう情報は来なかった。
- スポンサーは後で謝ってすむ方ばかりなので気にしないで非常放送できる。夜中の CS 時間帯は元々 CM が一切ないので切れる。

2.4 災害後の改善策

岡崎市は、今回の水害で住民への即時同報伝達が困難だった教訓を踏まえ、「防災（緊急告知）FM ラジオ」を普及させる対策を始めた。導入したひとつは、緊急告知放送時に自動的に起動する専用の FM ラジオで、FM おかざき（76.3MHz）だけが聴ける。市が同報系防災行政無線に流す類の緊急情報を FM おかざきに依頼して流してもらい、住民が一斉に聞くことができる。この取り組みについて聞いた。

- 調査時点ですでに浸水被害宅を中心に 1,000 台近く配られていたほか、次年度からは市民が希望すれば助成を受けて購入できる。受信装置の価格は 1 台 1 万円せず、同報無線戸別受信機に較べコストがかからない。
- 緊急告知ラジオは、割り込み放送と、独自放送の両方を想定している。以前から電話回線を通じた割り込み放送装置を備えていたが、これまで使ったことはない。自らも市からも割り込みすることができるが、放送局に人がおらず間に合わないときにのみ使用を想定している。



写真7 FM おかざき聞き取り調査



写真8 緊急告知 FM ラジオ

- ・ ラジオの受信可能エリアよりも、自動起動がきちんと反応するエリアは狭い。DTMF 信号（特定の数字の組合せ）を音声（音程）で放送の中に割り込ませる方法により起動しており、家の中など置き場所によってはきれいに信号が読み取れず、起動しないことがある。

3. まとめ

以上の聞き取り調査結果に、若干の考察を加えた。

岡崎市は、災害時の市民への情報発信の手段のひとつとして、地元 CATV 局のミクス、コミュニティ FM 局の FM おかざきと「災害時の放送に関する協定」を結び、緊急放送を依頼している。ミクスは、独自チャンネルのうち市の広報を専門に扱う「チャンネルおかざき」で L 字画面を用いた防災緊急放送を行っている。FM おかざきの場合は、通常番組を中断してコメントが読み上げられる。いずれも市の防災広報手段の一環としての位置づけから、市から届いた情報の中身をほぼそのまま伝えており、他の一般マスメディアの災害報道とは少々性格が異なる。

平成 20 年 8 月末岡崎市「ゲリラ豪雨災害」時の非常放送は、真夜中、突然襲った雷を伴う猛烈な雨、大雨洪水警報、全市避難勧告、各所で被害続出という、2～3 時間で立て続けに起きた異常事態に、必ずしも理想的な初動対応はとれなかった。29 日 02:10 の避難勧告情報が実際にオンエアされたのは、CATV が約 25 分後、ラジオが約 1 時間後、そもそも市からの FAX 連絡自体が約 20 分後の着信だった。ひとつには、市役所の通信設備が浸水被害を受け、市から放送局への情報伝達と確認作業に齟齬が生じたこと、そして、道路などに被害が発生している真っ最中、放送局側も態勢の立ち上げが円滑にできなかったことなどが要因だった。番組終了後の時間帯だったこともあり、コミュニティ放送を通じて、はたしてどれくらいの市民が緊急情報を得、実際の対応行動をとったかには疑問符が付こう。

しかし、被災後はひと月以上にわたる期間、コミュニティ放送の強みを活かして地域住民へ向けたきめ細かな情報伝達を日々行った。被災者ニーズに即した生活ケア情報を伝えることは、広域エリアを視聴対象とするマスメディアにはなかなか真似できない。つまり、発災当初の切迫した緊急情報を伝達するには態勢面等での脆弱さを抱えているが、復旧・復興期に市民へ生活関連情報を提供する局面では、期待された役割をいかに発揮した。

とはいえ、ひとたび災害が発生すると途端に多量の情報が洪水のように発生する。コミュニティ放送ならば地域を限定して具体的な個別情報まで流せるが、いかんせん規模が零細なため取材や編集にあまり手間暇がかけられない。県の高度情報通信ネットワークシステムの情報や気象庁（台）の発表文も、FM おかざきには来ていない。このようなことを考えあわせると、いま総務省で計画されている「安心・安全公共コモンズ」のような、信頼できる災害情報のソースを共有・流通できるシステムを、早期に実現してもらいたい。

また、コミュニティ放送の場合、昼間であってもはなから常時そのチャンネルにあわせ市民が視聴しているとは限らない。そのため、複数の情報伝達経路のひとつとしてならいいが、確実に伝わる手段とはならない。そもそも CATV の場合、線のつながっている世帯

が限られ、放送電波ほど普遍性がない。

災害後、市で新たに導入された「防災（緊急告知）FM ラジオ」は、その弱点をカバーできる仕組みだといえる。岡崎市は、2006 年に額田町と合併したが、同報系防災行政無線は旧額田町エリアだけにあり、旧岡崎市に住んでいる住民や、入り込み者に対する、同報無線にかわる即時一斉伝達手段として、NTT ドコモの「エリアメール」災害・避難情報配信と同様に位置づけられる。これらはいずれも既存のインフラを使うことから、すぐに整備でき、コストが安い特徴がある。ただし、現在のところ FM おかざきの電波は、市内全域をカバーしておらず、難聴の旧額田町エリアについては防災行政無線や、ミクスの CATV 回線がつながるようになった時点でそこに載せる（停電時のラジオならではの効用は期待できなくなるが）等の補完策が必要である。

以上のように、“緊急”放送の有効性を高めるためには、まず市と放送局間の連絡体制を強化し、いくつかの即時一斉同報伝達手段のひとつとしての能力アップを行い、いざというときに備え、より多くの市民にきめ細かな情報が伝えられるような補強策を推し進める、そして、日頃から視聴者への周知徹底をはかっておくことが求められよう。

これまでも地震災害などにおいてコミュニティ放送の貢献ぶりは枚挙にいとまがなく、今後とも地域の防災・災害情報伝達場面での一層の活躍を期待してやまない。

謝辞

本調査にご協力いただいた、ミクスネットワーク株式会社の森崎健吾編成部長、株式会社エフエム岡崎の阿部年恭取締役営業部長、ならびに岡崎市総務部防災課の各位に御礼申し上げます。また本稿作成にあたり、参照文献 1) の 4.3.3 コミュニティメディアを執筆された武居信介氏、録音起こしを提供いただいた廣井慧氏をはじめ須見徹太郎団長ほか調査団各位にお世話になりました。改めて感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 日本災害情報学会 2008 年 8 月末豪雨等調査団(2009),2008 年 8 月末豪雨災害等に関する調査報告,日本災害情報学会誌「災害情報」,No.7,pp.152-173
- 2) 船崎幸子・長坂俊成・臼田裕一郎・高橋明子・安倍祥・天野竹之(2008), リスクガバナンスからみた柏崎市 FM ピッカラ災害放送の検証—発生後 3 日間を中心として—,日本災害情報学会第 10 回学会大会予稿集,pp.359-364
- 3) ミクスネットワーク株式会社ホームページ(参照年月日: 2009.05.05), www.catvmics.ne.jp/
- 4) 株式会社エフエム岡崎ホームページ(参照年月日: 2009.05.05), www.763.fm/
- 5) フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』: ミクスネットワーク(参照年月日: 2009.05.05), ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9F%E3%82%AF%E3%82%B9%E3%83%8D%E3%83%83%E3%83%88%E3%83%AF%E3%83%BC%E3%82%AF
- 6) フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』: エフエム岡崎(参照年月日: 2009.05.05), ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A8%E3%83%95%E3%82%A8%E3%83%A0%E5%B2%A1%E5%B4%8E